

令和5年 10月 20日

ひびきウインドエナジー株式会社  
代表取締役 水町 豊 様

日本野鳥の会北九州支部  
支部長 川崎 実(公印省略)

公益財団法人日本野鳥の会  
理事長 遠藤 孝一(公印省略)

## 北九州響灘洋上ウインドファーム(仮称)事業における洋上風車建設の見直しを求める要望書

本年、5月23日に当支部から貴社に提出した「事後調査計画の見直しを求める要望書」に対する回答を8月1日に受領しましたが、その内容は鳥類への影響実態を把握し、軽減するには極めて不十分なものでした。25基の洋上風車によって多数のバードストライクが発生することは必至であり、響灘海域の生物多様性を危うくするものと言わざるを得ません。よって、下記の理由により、本事業における洋上風車建設の見直しを求めます。

### 【洋上風車建設の見直しを求める理由】

1. バードストライクを防ぐための、実効性ある対策を実施してほしい。  
海外では、近距離から長距離まで探知できるレーダー(※1)と、高解像度カメラを組み合わせ、AIを利用した衝突防止(自動シャットダウン)システムや、さらに高精度なレーダー(※2)と監視カメラを利用した遠隔操作による衝突防止システムを採用している。本事業でも積極的に採用すべきであるが、検討する姿勢すら見えない。  
※1. XおよびSバンドレーダー、※2. フェーズド・アレイ・レーダー
2. 約20年間稼働する洋上風車の事後調査が1年間とはあまりにも短いので、鳥類への影響実態を正確に把握する対策を取ってほしい。事業予定海域に渡来する渡り鳥の数の年変動や、気象条件による鳥類の行動変化、さらに海上に突然出現する多数の風車に対する行動変化等を複数年調査する必要があるが、わずか1年間の調査で済まそうとする姿勢は容認することができない。
3. 鳥類の衝突状況を監視するための動物熱感知システム搭載のカメラは、設置する25基の風車のうちわずか2基であり、風車設置予定区域全体のバードストライク状況を把握する対策を取ってほしい。風車へのバードストライクは必ず発生するという観点と、鳥類への影響は小さいと予測評価したその検証の必要性からも、少なくとも半数近くの風車に監視カメラの設置が必要であるが、わずか1年間のみでは短すぎる。一応カメラで監視したという既成事実作りの姿勢は容認できない。
4. 鳥類の死骸確認と回収を定期点検に合わせて月4回船舶で周回して実施するということについては、その実効性に問題があることから、影響実態の把握を積極的に行うよう、努めてほしい。  
落鳥した死骸は、海流によって遠く運ばれ、捕食され、または沈んでしまうため、死骸発見は不可能に近い。さらに、天候の状況によっては、月4回の周回さえ実施できない可能性がある。

以上の理由により、当会は予防原則に基づき、本事業の建設工事を根本的に見直すことを強く要望する。

私たち日本野鳥の会は、地球温暖化防止に有効とされる風力発電の重要性を認識しています。しかし、その建設場所によっては、鳥類への影響が大きいことを従来から懸念しており、特にこの度の事業計画は、北九州市における稀な島嶼地域の生態系に大きな影響を及ぼし、北九州市の環境施策における生物多様性の保全上も問題があります。私たちは鳥類に影響が少ないと推定できる建設場所と規模であれば、また、実効性ある影響軽減策を実施するのであれば異議を唱えません。貴社および共同出資五社におかれましては、風力発電と野鳥の共存のために、建設の見直しを求めます。